

笠井潔

ヴァンパイア  
血風録

九鬼鴻二郎の冒険 1



KADOKAWA NOVELS

神授の戦士・九鬼の若き日の死闘。  
運命は、殺戮と破壊の濁世に花開く。  
白熱のSF伝奇アクション



ガクカハルズ

平成元年六月二十五日初版発行

著者 笠井潔 かさい きよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー血風録 けつぷがらろく

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五〇八

〒一〇三 電話 営業〇三七八五三 編集〇三七八四五

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771612-X C0293

笠井潔

ヴァンパイア  
血風録

九鬼鴻二郎の冒険 1



KADOKAWA NOVELS

神授の戦士・九鬼の若き日の死闘。  
運命は、殺戮と破壊の濁世に花開く。  
白熱のSF伝奇アクション

# EMMA STEINOPOLIS

## ●作者のことは

パリの裏街でキキと出遇い、ムラキに再会するまでのあいだ、

若き九鬼鴻二郎は、くきこうごろうどんな血湧き肉躍る冒険の数々を生きてきたのだろう。

『ヴァンパイヤー戦争』ヴァンパイヤー完結後、こんな設問が頭から離れなくなった。

どうやらヒーロー九鬼は、簡単には作者を自由にしてくれないようだ。

若き九鬼鴻二郎の冒険は、海を渡り、なおも続きそうな気配である。

略歴Ⅱ一九四八年東京生。処女作『バイバイ・エンジェル』で角川小説賞受賞。ミステリー、SF、評論の分野で活躍。







ガクカパルズ

平成元年六月二十五日初版発行

著者 笠井潔 かさい きよし

発行者 角川春樹

ヴァンパイヤー血風録 けつぷらろく

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九五〇八

〒一〇三 電話 営業〇三七八五三 編集〇三七八四五

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771612-X C0293





KADOKAWA NOVELS

---

ヴァンパイヤー血風録

九鬼鴻三郎の冒険 1

笠井潔

目次

序章 二十年前——熊野山中

9

第一章 アスファルトの闘技場

15

第二章 罨わなに落ちたテロリスト

58

第三章 フロツピーの時限爆弾

107

第四章 非合法員のパスポート

160

終章 二十年後——根室海岸

207

序章 二十年前——熊野山中

焚き火の炎が、ちらちらと風に揺れていた。若い妻が、焚き火の横でシユラフにくるまり、死んだように熟睡している。藪をかきわけながら急斜面を登り続けた一日で、体力を底の底まで搾りつくしたのだろう。

腕時計を見ると、もう深夜にちかい時刻だった。妻の寝息を聞きながら、九鬼貢は足下から、太めの枯れ枝を二、三本とりあげた。日没前に集めておいた薪の山だが、もう半分も残っていない。

集められた枯れ枝は、若い九鬼夫婦に熱と光を供給するため、あらかた灰に変えられたわけだ。青年は慎重な手つきで、残り少ない枯れ枝をひと握り、炎のなかに押しこんだ。とにかく、火を絶やすわけ

にはいかない。

本宮からバスで、十津川ぞいに半日ちかく、熊野から吉野の深山に入りこんだ。風屋ダムから滝川の沢を遡り、東に釈迦ヶ岳、地藏岳、涅槃岳の連山を見あげる集落に、ようやく辿りついたのが、昨日の夕方のことだった。

そこは、木洩という名前の廃村めいた山間の小集落で、見たところ戸数は十戸にも満たない。木洩の南東には、標高が千メートルもない小さな山がある。地元では木洩山と呼ばれているらしいが、登山ガイドにも載せられていない平凡な山だ。こんな山に登るような登山客など、一人もいないということだろう。

昨夜は木洩に宿を求め、そして早朝、木洩山の山頂めざして出発した。材木の切りだしのため中腹までは林道がつけられていたが、その先は人跡未踏の原生林で、貢でも音をあげそうにきつい藪こぎが半日以上も続いた。

妻の百合子は、山歩きに多少の心得がある。二人が初めて出遇つたのも、学生時代の北アルプス登山の折だつたのだ。夫とともに、なんとか山頂まで辿りつけたのは、そのためだろう。

山の経験がない都会の女なら、山頂まで辿り着けたわけがない。それほどに過酷な登山だつた。

疲労して眠る妻の寝顔をながめながら、青年は残りすくない枯れ枝を何本か、また炎のなかに投げこんだ。

貢は、単独登山で天幕装備もなく、人里はなれた山中に野宿したような経験も少くない。雨は降りそうもないから、このまま妻の隣でシユラフにもぐりこんでもいいはずだが、なぜか火を絶やす気になれないのだ。

木洩村で、炭焼きの老爺に脅されたせいかもしれない。老爺は、木洩山に登ろうという無謀な若夫婦に、朴訥な口調で忠告した。木洩山には狼が出る、あの山には近づかない方が無難だと。

だが、東京の大学で民俗学の講師を務めている貢は、無知な老人の言葉を感じる気にはなれなかった。たとえ吉野や熊野の山奥であろうと、日本列島に狼が棲息しているわけではない。北海道で熊が出るというならともかく、吉野であろうと熊野であろうと、ニホンオオカミは百年以上も昔に絶滅しているのだ。

迷信じみた老爺の忠告は無視して出発し、妻の百合子と二人、とにかく木洩山の山頂まで辿りついた。自分でも理解できない怖れを感じはじめたのは、日が暮れてからのことだつた。老爺の忠告の言葉が、否定しても否定しても脳裏に甦ってくる。

人跡未踏の深山で、濃密な闇と沈黙に包まれていると、あらゆる常識が頼りなげに揺らぎはじめる。疲労のため、たちまち寝息をたてはじめた妻を横目で見ながら、貢は朝まで、焚き火を絶やさないうようにしようとしたのだ。

野獣なら、火を怖れるはずだ。もしも老爺の忠告どおりに、熊野の山奥にニホンオオカミが生存して

いるのだとしても、焚き火が燃えているあいだは襲撃してこないだろう……。

馬鹿馬鹿しいと思いつつも、貢はもう五時間以上も、狼の襲撃にそなえて焚き火の番を続けていた。「貢さん。まだ起きていたのね」

足下から、囁くような声が聞こえた。目覚めたらしい百合子の声だ。貢は、妻を落ちつかせるように低い声で応えた。

「起きなくてもいいよ。まだ朝には間があるから、そのまま寝ていなさい」

「いいえ、よく眠りました。今度はわたしが、焚き火の番をするわ。貢さん。代わりにやすんで下さる」

薄い夏用シュラフから、身をくねらせるようにして脱げだして、百合子が焚き火の前に坐りこんだ。やつれ気味の顔が、燃えさかる炎に赤黒く染められている。百合子が枯れ枝で火をかき立てながら、ぼつりと問いかけてきた。

「花山院の調査なんて、嘘でしょう」

「そんなことはない。花山院が熊野放浪の際に、この木洩山を訪れたという記事を、僕は鎌倉時代の古文書のなかで見つけたんだ。真偽不明というべきだろうが、とにかくそれで、ここまで来てみたくなった。ほんとうさ」

花山院は天皇位にあること三年、わずか十九歳で讓位出家し、叡山で仏道修行を重ねたとも、熊野山中を修行のために放浪したとも伝えられている。即位儀礼に際して内侍を強姦したとか、その乱行奇行の数々は皇位をおとしめる、藤原氏の専横に対する抵抗であったらうと解釈されている。

「嘘よ。貢さんは、わたしを元気づけるために、こんな登山計画を立てたんだわ。そのことをわたし、ほんとうに感謝してる。本心から感謝してるわ」

やはり百合子の心には、半年前の流産の衝撃が、いまなお深い傷として刻まれているのだ。以後、妊娠することはないだろうという医者宣告を聞かさ

れた以上、それも当然のことかもしれない。

ひどい鬱状態<sup>うつ</sup>でいた百合子を励ますためなら、貢はなんでも出来ることをしたろう。それで、百合子は今回の木洩山登山もまた、仕事のためという口実で自分の気分転換をはかろうとした、夫の好意ある作為に違いないと信じているのだ。

だが、それは違う。違うが、熊野の山奥にある花山院の放浪先のひとつに、学問的な興味を抱いたからだけでもない。そうではなく発端<sup>はつたん</sup>は、二週間前に大学の研究室でうけた、あの謎めいた電話にあるのだ。

貢であることを確認すると、電話の主はあたりまえのような口調で命じた。電話の声は、若い女のものらしく聞こえた。

「……わたしは、コムレのマキ。これから指定する日に、奥吉野の木洩山の山頂で待ちなさい。あなた一人ではなく、奥さまと一緒に待つよ」

この電話に、貢は息もできないほど驚愕<sup>きょうがく</sup>した。

「コムレのマキ」という名前は、忘れようにも忘れない、一度きりの人生の重大事と結びついていたらだ。

一度きりの人生の重大事、つまり父の死のときだった。臨終のときに新宮の病院で、老父が長子の貢だけを枕元に呼んで、遺言としていい残した言葉がある。

「いいか、貢。おまえも、あちこちで密かに聞かされておるじゃろう。わが九鬼家は、熊野九鬼氏の本流じゃ。おまえは何千町歩もの山林を相続することになるが、それもまた、九鬼氏本流の遺産と心得るがよい。

おまえが遺産を相続するならば、同時に九鬼氏嫡男<sup>ちやくなん</sup>の義務をも受けつぐことになる。義務といえば大袈裟<sup>おおげさ</sup>だが、中身は簡単じゃ。いいか、貢。わが家には、秘密のうちに忠義を尽くさねばならぬ主がおる。『コムレのマキ』さまじゃ。

『コムレのマキ』さまが命じられた言葉なら、万難

を排しても実行せねばならぬ。それが、熊野九鬼氏本流の嫡男のさだめなのじゃ。わしの代まで、五百年にわたり『コムレのマキ』さまから、とりたてて指示はなかつた。おまえの代にもなければ、それはそれでよい。

おまえは息子に、わしと同じように遺言すればよいのだ。だが、おまえの代に『コムレのマキ』さまから指示が下された場合には、それを九鬼家嫡男の名誉と心得よ。たとえ命を投げだせという指示であろうとも、背くことはまかりならん。いいな、貢」

老人の妄想だと決めつけてもいい、どうにも非合理な遺言というべきだろう。実際のところ貢は、長いこと死の直前の老父の言葉など、まるで忘れてさえいたのだ。コムレのマキと名のる女から、謎めいた電話があるまでは。

電話の女に命じられた通り、なぜ妻の百合子まで巻きこんで木洩山登山を実行したのか、いまでも理由は自分にも判らない。老父の遺言だからというよ

り、そうすべきだと自然に感じたのだ。電話の女の声には、背くことも抗うことも許さないという、不思議な強制力があつた。

「あなた、あれはなに」

そのとき、焚き火の前で膝をかかえていた百合子が、闇の彼方を指さした。妻の恐怖に動転した言葉に、貢も思わず振りかえる。

闇のなかに、巨大な獣のシルエットが浮かんでいた。成長したセントバーナードほどもある巨軀、クリーミたいな長い吻、シェパードの三角耳。そして全身が、みごとな銀色の剛毛に覆われている。そいつが、乏しい焚き火の明かりに照らされて、こちらを凝然と見つめているのだ。

恰好は、どうみても狼だ。しかし、これほどに大きなニホンオオカミなど、自然に存在しうるのだろうか。貢は全身を強張らせ、闇にひそむ銀色の巨獣を注視していた。狼は口に、なにかをくわえているらしい。

「あなた、赤ちゃんが」

百合子が、こんな絶叫とともに立ちあがる。よせ、よすんだ。貢が叫ぶよりも早く、百合子は怖るべき巨獣の方に、おのが身を投げだしていた。

たしかに銀狼は、白い産着に包まれた赤子をくわえている。妻の運命を思い、一瞬、貢の心臓が凍りついた。狼は赤子を足下におろし、駆けつけてくる女を睨みつけて、威嚇的な唸り声を洩らしはじめた。

猛獣の眼前で、百合子はひるむことなく赤子を抱きあげる。腕のなかの赤子をかばい、燃えるような眼で狼を睨みつけた。応えるように、巨大な狼が満足そうに唸る。どうやら、襲撃の意思はないらしい。貢が駆けよる寸前に、狼は身をひるがえして、闇の奥ふかく姿を消していた。

「赤ちゃんよ、あなた。赤ちゃんなのよ」

産着の幼児をあやすようにしながら、歌うように、陶然として百合子が呟く。貢は、ほとんど恍惚とした妻の表情を眺めながら、それでも不安な気分で沈

黙していた。

わが家系の主だという謎の人物は、自分に、この子供を育てよという指示を暗黙のうちに下しているのだろうか。

それには、果たしてどのような意味があるのだろうか。この子供は、そして自分は、どのような未来を迎えることになるのだろうか。

あれこれと考えながら、貢は力なく首を振った。このように預けられてしまった以上、この子供を育てなければならぬという運命は、すでに決定されているのだ。いまさら、迷うまでもないことではないか。

赤ん坊が、猛烈な勢いで泣きだした。いかにも気の強そうな泣き声だ。なにを要求しているのか、体をふるわせ眼をむいて泣き続ける。百合子が自分の子のように、なだめようとして夢中で語りかけていた。



## 第一章 アスファルトの闘技場

### 1

真夜中の緊急電話から一時間以上もたつというのに、まだタケオは着かない。やつは受話器のむこうで、詳しい話をしたい、これから行くと、殺気だった声で叫んでいた。

もう深夜一時をすぎている。江東区にあるタケオの実家からバイクで飛ばせば、世田谷までせいぜい三、四十分というところだろう。まさか、スピード違反で挙げられたわけではあるまい。そんなドジなやつではない。では、なにをしているのか。

おれは血がにじむほどきつく、唇を噛んだ。まだ

詳しいことは判らないが、タケオの話では、どうやら「マッドライダーズ」のメンバーがひとり死んだらしい。

事故とトラブルは、おれたちの宿命だ。そいつを絶対に避けたいというなら、街道ライダーなんかには志願しない方がいい。ライダーズのメンバーのほとんどが、事故歴や負傷歴の持ち主だ。それでも死者は、まだ一人も出してない。

おれは苛々して、拳固で壁を叩いた。とにかく、仲間が死んだという知らせをうけたのだ。敵対グループから「閻魔」という仇名を頂戴しているおれだが、とても穏やかな気分ではいられない。

おれの名前は九鬼鴻三郎。「閻魔」というのは、名字の九鬼からきている。鬼の群れを率いる者、つまり地獄の大王というわけだ。喧嘩で、おれが半殺しの目にあわせたやつは数知れないから、こんな仇名を頂戴する羽目になった。

また時計を見る。落ちつかない気分です室を眺め